



註 (数字は本文中の番号)

1 サビア ブラジルの国鳥といわれる。体長二十五センチ位、灰褐色で喉に褐色の条があり黒く大きく境は黄、鳴き声は多く人に好かれる。ツグミ科の鳴禽。人里を好む。季語は春期。

2 アラポンガ 俗称鍛冶屋鳥。森の高木に止まり金床を叩くような高音で鳴く。小刻みに打つ時と大きく打つ時がある。初代は鳴かないので籠鳥は全部二世以降のもの。

3 ジョゼと呼ばれて 「ジョゼ」はありふれた名前なので、知らない人に呼びかける時にも遣う言葉、ジョゼさんというように。

4 イペー ブラジルの春の山野を飾る花木。自イペー、紫イペー、紅イペー。黄色の黄イペーはブラジルの国花となっている。完全な落葉樹。

5 シュラスコ 大ぶりの牛肉を生木串に刺し、野外に掘られた長いかまどにかけ渡して焼くブラジルの野宴。一年中あるが季節感から俳句では冬として扱う。味付けは岩塩のみ。もとは仔牛の丸焼きであったという。

6 ジャルジネーラ ブラジルの開拓時代に重用された両側

開放、板座席の乗合バス。こうしたことから小型のお粗末なバスもこのように呼ばれるときもある。

7 チジュー 雀大の小鳥。嘲るときは必ず三十センチくらい跳び上ってチジューと 鳴くのでこの名がある。雌している感じ。春。

8 トツカーノ 南アメリカの原産の鳥で小型から大型までさまざまある。赤、黄、青、緑、白など美しい色彩のほか体長の三分の一位の巨大な嘴が特長。鳴き声は甲高い。秋。

9 パイナーラ 大木になるキワタ科の落葉喬木。淡紅色の大型花。遠景はさくらの満開に似る。秋。

10 ジョンドebarro 農家で築くパンがまに似た巣を作るブラジルの野鳥。百舌大、人里を好む。barroは泥、ジョンは人名。春。

11 狐ジュワ ジュワはブラジル全土に自生する、茄子科の多年草。狐の顔に似た実をつけた種類はこの名で呼ばれる。狐ジュワの実は黄色。秋。

12 脂肪草 アフリカよりの帰化植物。萱状で丈一メートル余。全体に線毛を有し、脂肪分に富む薄紫の牧草。同色の穂が一斉に出揃う。冬。

13 ジャララカ 小型マムシ科の毒蛇。致命的な毒を有し、人の被害の七、八十%は これによるといわれる。夏。

14 ベンテビー 小鳥の名。鳴き声そのまま呼び名となった。百舌大。人里を好む。 春。「よく見ました」の意。

15 ジュニナ祭 ジュニナは六月祭月という意味。サンアントニオ、サンジョン、サンペードロの三祭日あり、六月中を通じて「神の旗」「マストロ」等を立て 「バロン」を放ち、「花火」を打揚げ、「焚火」「踊り」などに打ち興じる。

16 泣虫の木 細くて長い葉が夙によく鳴るのでこの名がある。松の種類。冬。

17 ピラニヤ 小型は十八センチ位、大型は四十五センチもある。鋭い歯を持ち、遊 泳中の人が襲われることがある 猛魚。平アジの形。夏。

18 バウル サンパウロ州奥地の中都市、ブラジル俳句の開拓者佐藤念腹の晩年の地。

19 パウダーリョ パウは樹、アーリョはニンニク、強力なニンニクの匂いを発する 樹木。この樹の立っている原林は肥沃という。

20 花ジンジャー ショウガ科の多年生植物。芳香のある白色の花を開く。湿地を好んで自生する。秋。

21 ジャツカ 亜熱帯性常緑喬木。果実は直径三十センチ位にもなり重いものは三、四十キロになる。強い臭気があるが好む人には大いに珍重される。ドリアンとは違う。夏。

22 アバカテ アバカドー。牛酪果。秋。

23 パモンニヤ 唐もろこしのまだわかい生をすり下して牛乳、チーズ類を入れ混ぜその外皮にくるんで結び熱湯で茹でる。ブラジル風のチマキ。秋。

24 タスマニヤ 濠州の東側南方にある北海道くらいの島。黒白鳥の故郷。

25 フェジョアーダ フェジョアーダは干し牛肉、豚肉、骨付あばら肉の燻製、ソーセージ等を黒ささげでローロという香料の木の葉を入れて煮込にした代表的なブラジル料理でシユラスコと並ぶもの。奴隸の料理を元祖とするといわれる。冬。

26 ビタミーナ 「栄養素」という意味であるが、牛乳と果物、或いは野菜類などを

混ぜてミキサーにかけた夏向きの飲料。夏。

27 マモン パパイヤ。

28 カビバール 水豚。地上最大の齧歯類といわれ体長一メートル以上、体重七十キロに及ぶ。モルモット型、遊泳巧秋。

29 甘庶原 甘庶は枯葉を焼き払ってから刈られる。

30 円ナイフ 先の尖っていないまるいナイフ。

パラナ州 サンパウロの南接の州、日本の本州よりやや狭く、ロンドリーナ市は小さいロンドンという意味。北パラナの中心地で人口三十五万、パラナ第二の都市。

句集名「相聞歌」に就いて

私は今迄に三回にわたって一人暮しをしてきました。第一回がコロラード時代のロバート、第二、三回がロンドリーナ郡のタマラナであります。そのタマラナにいた頃の事になります。写場という仕事のため一日中店があけられず身辺一切の仕事は全部自分で片づけていました。そこへ時折ロンドリーナの家人から「差入」が届けられてきました。今日は二人の結婚何年目だからとか、あるいは貴男の誕生日だからと行って、知人に託すけられてくるご馳走であります。私のような迂濶な者は思いだもしない日付ばかりであります。当時はまだ日本産の海苔は貴重品で、街に出回っていた海苔というのは、皆ブラジル産の薄っぺらで穴だらけのひねた見るからに粗末な物でありました。家人はその海苔を破らないようにのばし、ばらつきやすいブラジル米のご飯を丁寧に展ばして巻かれたすしが夜十時頃私の許に届けられてきたものであります。私はそれを仕事をすませて夜食にたべておりました。今では自由貿易のお蔭で望みのものは何一つ手に入らないものはありませんが、昔このような生活があったことは人生にとって大変仕合せであったと思います。クマラナは標高七、八百メートルの高原になり冬季は夜になると濃い霧に包まれておりました。その中を手紙と共に託すけ物の届いたとき生れたものが標題の左の句

ぬばたまの夜霧を返す相聞歌

であります。別にいい句でも何でもありませんが苦労ばかりかけてきた家人にわずかばかり感謝の気持を込めたものにはかなりません。

上梓に先だち第一番目に挙げさせて頂きますのが私を今まで育てて頂いた、既に亡くなられて久しい野見山朱鳥先生のご鴻恩であります。次に辺境にある私を見出して頂き、日本にあられて出版その他一切の労を取って頂きました加藤耕子先生、綿密な校正をしていただいた藤島咲子氏、面倒な連絡に当って頂いた石崎緑風氏、蔭にあつて常によき助言を頂いた鶴同人の添田香積氏、影の如く私の傍にあつてすべての整理、編集、タイプ一切を取り仕切ってくれた妻の久子、俳句によき理解を示し援助を惜しむことのなかった四子、たゆまず研鑽を共にしてくれたよき仲間の皆さん諸氏に心からお礼申し上げます。

富重 かずま

あとがき

コロラード

今を遡ること三十数年前の一九五九年一月十八日、上陸港サントスからアプト式鉄道でサンパウロ高原に登ってきた私共家族四人は、サンパウロ市の街中にある煤けたルース駅でパラナ行の列車を待っていた。日本から着いたばかりの四人の家族は誰が見ても一目で新来のそれと判るいでたちであった。そこへ一人の日本人が近づいてくると、「どちらへ入られるのですか」と問いかけてきた。四十過ぎの上背のある痩せ型の精悍な感じの男性であった。「パラナのコロラードという所ですが」と答えるとこの人はかなりこの方面の事情に詳しい風で「それはいいことですね。今回の移民は殆んどがサンパウロ州の呼寄のようですが、今ではもうサンパウロ州は拓けきって日本と変わりありません。その点パラナを選ばれた貴方がたはよかったですよ。こんどいかれるコロラードというところは土質もいいし、今からというところですからね。一所懸命働かれればきつといいことがありますよ」と心から私共を励ましてくれた。五十日間親しくしてきた仲間達と離れてパラナへたった一家族だけ入っていく心細いときであっただけにこの人の言葉は掛替のない心強いものであった。

コロラードは標高四百メートル前後の準平原の上質の砂質壤土の上に生れたばかりの町であった。既にコマルカ(郡)に

指定されていたこの町は、まだ電気はおろか水道もアスファルトもないむきだしの砂地にただっ広い道が縦横に走り、ペンキで厚化粧した板屋の店が軒を連ねている丁度アメリカの西部劇にでてくるセットのような町であった。市街は中央の一部を除くと殆んど家はなく、区画整理を終えたばかりの宅地には巨大な原始林時代の切株が立ったままで、周囲には無数の焼け残り丸太が横たわっており、さながら荒海の観を呈していた。

四囲にはまだ可なりの原始林が残っており、夜高みへでると遠近に山焼きの景が望見された。私はよくもやってきたものだと思ふと同時になるほどこれが新開地というものか、と合点させられた。

私共がここに移住してきたのは、この町の日本人学校の日本語教師としてであった。妻の久子がもと中学で教鞭をとっていた経験を買われてのことなのであったが、間もなく次女を妊つたため未経験の私と替らなければならなくなった。家人と入替って二年も教師をする間に持参してきた資金を悉く使い果してしまった。辞意を願いでも後任のないことを理由になかなか辞めさせてもらえずそのままずると五年余を経過してしまった。

その間妻の久子は三女を生むと小さい食堂をだしていた。これがよく流行って十分に生活を支えるところとなってくれた。私の方は半ば無理をいって学校を辞めさせてもらうと四十キロ離れた隣の小さな町へ単身赴いて写場をあげた。昔から好きであったということもあり先ず仕事を身につける

ことが主目的であった。子供達四人はどんどん成長し長女は着伯した年から首席を続け中学も最終学年に近づいていた。既に、医科を目指しはじめた長女のためにももうこの町に長居はできないというさし迫った状態に追い込まれていった。

コロラードという町は、南回帰線より六十キロばかり赤道寄りに位置しているため年の瀬が迫ると、南下してきた太陽が井戸の中へ落ち込んでいた。二十数メートルの井の底に耀々と輝く太陽はこの上もない神秘的な美しいものであったが、私には別に、また無為に過ぎなくてはならなかった一年が頻りに悔まれたのである。

応急措置として長女と長男をロンドリーナ市（州立総合大学の所在地）の知人に預けて転校させ、私共一家はP市管内のタマラナという同市を四十キ。離れた四百年の古い歴史をもつ小ざっはりした小邑へ移っていった。やっとコロラードを離れられる思いに私はほっと胸を撫で下ろした。

タマラナおよびロンドリーナ

コロラードが標高の低い砂質壤土の照り返しの強い土地であるならばタマラナは打って変わった涼しい高原、冷涼気候の大変住み心地のよい所であった。またここは三回に亘って私の人生の大切な避難港の役割を果してくれたところでもあった。私がこのあまり将来性のない小邑を選んで移転してきたのは、ここを一旦前進基地にして四十キロしか離れていないロ市に進出して子供達と合流を果すことが目的であった。

タマラナという町は四百年近い歴史を持つ静かなたはずまいであったが仕事の量は今一つ物足りないものがあつた。子供への仕送りと生活費に事欠くようなことはなかつたが、将来を考え、一年ほどで見切をつけて口市へ出ていった。

しかし立地に無理があつて半年も持ちこたえられずまたタマラナへ取って返した。タマラナは何故か私と同年配の戦後移民の多いところで一敗地にまみれて戻ってくる私を大喜びで迎えてくれるのも此処であつた。但し家人達は五人全部を口市に残し、またの進出の機会を伺つた。そのうち家人達から今度は大丈夫という知らせを得、下見にでかけた上で確信を抱いて引越していった。ところが不運というものは重なるもので前回より更にひどい不況にさらされることになつた。私はこの時はじめて写真の顧客というものが容易に動くものではないことを悟つた。座して食いつめる程つらいことはないが、私は少しも慌てる所はなかつた。二年余の間に完全に写真技術を身につけてしまつていたからである。時々往年の私等の婚礼の写真を見ながら”日本ではこの位で写真屋が出来るのだから”と喋り笑つたものである。私はいつか縦横に腕をふるつて見たいという気持ちからもうとつくに単身奥の新開地へ乗り込む腹を固めていたのである。一芸を身につけておいたのもブラジルでいざという場合に備えてのことであつた。

一刻も猶予ならぬ事態に直面してしまつた私はすぐ奥地の偵察に出かけた。

奥地に向うバスを乗替るため一旦マリランジャ・ド・スール

という町で下車した。この町には顔見知りの写真屋がいたので、二時間の待合せ時間を利用して訪ねていった。ところがいなくなっているのである。開けば二カ月程前引越していったというのである。この町が古いコマルカであることは前々から知っていたがそれ以上のことは知らなかった。私はすぐその足で市役所を訪ずれると郡の人口を尋ねた。職員に親切な人がいて、人口は六万であることを教えてくれたほかいろいろ参考になることを話してくれた後、腕の確かな写真屋がくればきつと忙しい程仕事があるだろう、ということをお願いそえた。もう奥地へ入る必要のなくなった私はすぐロ市へ取って返すと大急ぎでマリランジャ市へ引越していった。

マリランジャ・ド・スール

クマラナのほんの目の先二十キロのところにあつたこのマリランジャという町がまた一風も二風も変っていた。タマラナと同様四百年の歴史があるというものの、とてもコマルカと呼べるような所ではなかった。整然と都市計画がなされ、なだらかな斜面にきれいに石畳の敷かれた街路が碁盤の目に走り、夜は煌々と街燈が点されているのに家は殆んど建っていないのである。たまに一軒あるかと思うとすぐ二三軒空いているといった調子で、まるで墓場のような静かさ、一般商人なら目もくれないところであつた。

何故こうなつたかというところとある先代の市長が政争に敗れて、時の州知事の反感を買い、通るべき筈の国道が六キロも外れ

てしまったことに起因しているというのである。こうして世に見捨てられた廃墟のような町もさすがにコマルカだけのことはあつて学校は上は師範まであり、高みには調子外れに立派な裁判所が町を俯瞰していた。どちらを向いても五十キロ位は出ないと町らしい町はないという大時代的不便さが陰から仕事を大いに援助してくれるところとなった。

この町へ引越してきたのは年の瀬も押迫つた一九六八年十月二十日過ぎであつた。写場を整えて開業するのに二十日ばかりの日子を費し、店を開けたのは一月七日であつた。蓋を明けた仕事は思いの外好調な滑り出しであつた。撮影は月一千クロゼイロを望んでいたものが一月末二十日余の日数で早くも九五〇クロゼイロに達していた。私はやつとの思いで愁眉を開いた。この月の十八日が丁度私共の移住十周年に當つていた。親しい先輩移民の「ブラジルで生活の安定を得るにはどうしても十年かかりますよ」という言葉が思いだされた。

写場の隣の二タ扉は家人の好みで三人の伯人の娘さんを使って新鮮な感じのランショが開けられていたが、写場と相互の授け合い効果を呼んで町でただ一軒の明るい店に育つていった。

将来を考え下の二人の子も口市へだして上の子と一緒に住まわせ、車を買って与えた。私も必要上車を下した。撮影高は鰻登りに登っていった。もと一ダースずつ買っていた写真入れのカルテラは既に千枚入りの箱を写真館の名を刷り込

んで頼むようになっていた。昔を知っている材料店の主も今昔の感にたえないといった面持であった。

サンジョン・ド・イヴァイ

順調すぎる程仕事の方は実績を挙げていったのであるが、辺りの国道の地形の悪さに交通量の増大が加わって嫌な交通事故が頻発しはじめたのである。そして被災が両隣に及んでしまった。何とかしなくては、と思っっているところへよいニュースがもたらされた。マリランジャからサンジョンへ栄転していった銀行の支店長が行用で町へきたとき、家人のラシヨネットに立寄って「サンジョン市のどまん中の申し分ないいい場所を二扉貸しにだしているが権利金の高いことというのでまだ借り手のないままになっている。一度見に来たらどうか、貴女ならきつとうまくやれると思うのだが」というものであった。

マリランジャから丁度百キロ離れた町になるので日曜を利用して出掛けてみると、成程町は新開地らしい湧くような人出、貸出しの二扉は中央プラッサの真正面である。一目見るなり気に入った家人が今すぐ借りたいと言いだしたのである。私もそれとなく模索し始めていたやさきである。即座に一万の小切手を切って家主に渡しポイントを確保してマリランジャに帰った。店を処分して引越すまでに一月ほどかかったのであるが、その間サンジョンではマリランジャのジャポネースが一万の権利金を払って帰っていったという話で持ち切り

だったということであった。

引越してきても今までと違い売上を気にするような心配はさらさらなかった。家人のランシヨネツテは開店当日から大入の盛況でその景気が店を売り渡す日まで五年間続いた。私の写真の方は可なり大きな町なので既に二軒立派な写場があったが何食わぬ顔で割り込んでいった。私が写場のセナリオを組立てているところへ一人の大男がきて立った。「お前がこんどマリランジャからきた写真屋か」というのである。「そうだ」と答えると「よし、今から半年のうちにこの町から追いでしてやる」と凄んで帰っていった。私は歯牙にもかけなかった。一年もたたないうちに町の大半の撮影を奪った。他の二軒が悲鳴をあげてしまった。その頃から私は仕事の無理が応えて体調にかげりが見えはじめた。いつの間にか五十五歳という齢になっていた。どう見てもいい年である。そこで子供達の意見を容れて転業を考えることにした。

そのとき折よくホテルが売りに出されていたのを率いに、写場を整理した金を頭金にしてそれを買いとった。それから間もなく有史以来という寒さに襲われ、一望千里のコーヒー樹海が一夜にして潰滅してしまった。普通の霜害ならば根元から伐ってよみがえさせれば四年もたてば元に戻るのであるが、その時の寒害は根まで凍ったため全部抜根しなければならなかった。こうしてコーヒーの跡に棉作地帯が生れたのである。町のモビメントは、牧畜地帯、コーヒー地帯、雑作地帯という順に上っていくが棉作は雑作の中でも最も人手を要する作物である。これが景気を煽って町は人であふれ返った。

付が廻ってきたというより他に言いようがなかった。

ホテルを買うとき五十の寝台が最大半分埋まればよいという計算であったものが、連日満杯になるという予想違いが生じ、同時に買取っていたレストランテの方と並んで売上が伸びていった。

この間に長女が医科を卒業してサンパウロ総合大学の産婦人科研修医学生試験（百五十余名に二名）の難関を突破してサンパウロへ出ていった。三年後長男が医科を卒えるとブラジルから唯一人慶応医学部に招かれて東京へ旅立った。丁度還暦を迎えんとしていた私は決断を下すべきと判断し家人のランショ、私のホテルを売り払うとサンパウロを目指した。盛業中の店の処分は容易（たや）すかった。

着伯以来のパラナの二十年間は、決して日本人の好きな言葉の“成功”というようなものではなかったが、私のような我が儘者を何不自由なく振舞わさせてくれたありがたい自由の天地であった。それだけにパラナには感謝と名残に尽きないものがあった。別れを惜しんでくれる者の中に例の私に凄んだ大男の写真屋があった。「先生はサンパウロへいくのか、いいなあ」いろいろ質問に応じてやるうちに、何時の間にかこう呼ぶようになっていた彼も心から名残を惜しんでくれた。サンパウロへ越していったのは一月半ば頃であったのでパラナ生活がかつきり二十年に達していたことになる。折にふれて思い出されたのが到着時ルース駅頭に遭った先輩移民の「……パラナを選ばれてよかったですね。」という言葉であった。

サンパウロ

子供達の仕事の都合上、都心から五キロばかりのクリニカ病院（日本の東大病院に相当）に近いアパートに入居した。ここがまた大変なところであった。

夜は物音一つ聞えない田舎町と違い昼夜切れ目なしの街の轟音、煙霧に澱んだ空気、小さな窓から見える憂鬱な空、私は頻りにパラナを懐しんで子供達を困らせた。そのうち子供達の計らいで第一回の訪日を果した。その頃から私の人生の風向が少しずつ変りはじめた。日伯毎日新聞から声が掛って文章を寄稿しているうち、同紙に俳壇選者を依頼されたのがその始まりであった。三年後私はこの俳壇を踏切にして永年の念願であった主宰誌の創刊を果した。そのうちふとした切掛から俳人協会へ加入させてもらい程なく評議員に任命して頂いた。

どれもこれもみな思いがけない出来事ばかりであった。子供達に「どうです、サンパウロにできてよかったですよ」と言われてももう返す言葉がなくなってしまった。私はあと少しで七十五歳を迎えようとしている。どう見ても高年であるが幸いにしてまだ健康である。今後子供達の健康管理に従い少しでもブラジルに、俳壇に貢献していきたいと思う。

経歴

- 一九二〇年 十月二十七日、山口県玖珂郡周東町中山に出生。
本名富重計馬
- 一九三九年 三月、釜山第一公立商業学校を卒業
- 一九四〇年 十二月、現役甲種として山口歩兵第四二聯隊に入隊
- 一九四一年 四月、中支派遣二三三連隊に転属乙種幹部候補生
- 一九四六年 五月まで最前戦勤務階級曹長。五月、山口県仙崎に上陸復員 五月より四八年六月まで出生の本籍地に於て農業に従事
- 一九四八年 六月より肥料配給公団広島県安芸郡勤務・主事
- 一九五〇年 同公団解散
- 一九五一年 五月、山上久子と結婚
- 一九五八年 十二月まで食料雑貨店を経営
- 一九五九年 一月十六日ブラジルへ移住サントス上陸
- 一九六四年 五月までパラナ州コロラード市日語学校教師
六月、パラナ州ロバート市に写真館開店
- 一九六八年 パラナ州マリランジャドスールに移転。写真館、ランシヨネツテを開店
- 一九七六年 。パラナ州サンジョソドイヴァイ市に移転。旅館、レストランテを開店
- 一九八一年 五月、店を売ってサンパウロに移転。子供達に合流
- 一九九七年 三月、第一句集「相聞歌」刊行。家族 妻、四子健在。四子全員結婚

俳歴

一九四六年 復員直後母の奨めにより句作を始め蕪村句集に感銘

一九四七年 「俳句研究」に投句

一九五一年 郷土の月刊誌「鞍掛」に拠り「菜殻火」同人吉岡鬼胡の指導を受ける

一九五三年 「菜殻火」に拠り野見山朱鳥に師事、同人。「菜殻火」在籍中に誌友賞、新風賞、年間賞、菜殻火賞を受賞

一九五九年 ブラジル移住後は「木蔭」に拠り佐藤念腹に師事

一九八三年 一月、ブラジル日系新聞、日伯毎日新聞社の依頼により同紙、新聞俳壇選を担当

一九八六年 三月、月刊俳誌「蜂鳥」を創刊。今日に至る

一九九一年 四月、「菜殻火」を辞去。五月、「耕」に入会。加藤耕子主宰に師事

一九九二年 俳人協会会員

一九九三年 俳人協会評議員

現在 サンパウロ市にあつて俳句に専念。日系コロニア文芸委員。国際俳句

交流協会終身会員。「耕」名誉同人

句集 相聞歌（そうもんか）

平成九年四月二十日 発行

著者 富重 かずま

発行者 角川 歴彦

印刷 株式会社熊谷印刷

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―一三―三

〒一〇二

振替 〇〇一三〇一九―一九五二〇八

電話 (〇三三) 三八一七―八五八一